

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会/浜風会会報 No.44

2024.7.1

前浜は魅力がいっぱい

浜風会ではこの種、渚を前にして前浜の魅力はどんなところにあるか、子供の頃を思い出しながらじっくり語り合いました。



前浜の自慢出来るポイント

- ① 水平線が180度に広がる。
- ② 海は地域に寄り添っている。
- ③ 家から15分程で浜へ出られる。
- ④ 水がきれいで清らか、砂浜も。
- ⑤ 寄せる波は砂浜を這いあがる。
- ⑥ しかし自然以外なんにも無い。

海の癒し効果とは

人は生きて行く中で、時として壁にぶち当たることがあるものです。そんな折この浜へ出てほんやり海を眺めて見るのはいかがでしょうか。

波は寄せては返し波音も微妙に変化し永遠に繰り返しています。そんな大自然をここで感じたら、さぞすっきりして、悩んでいても始まらないと、思い直すに違いありません。海はそのような力を秘めていることは、うすうす感じていたのですが、これが海の癒し効果というものでしょうか。

ここで「海のもつ魅力の一つ・癒し効果とは」どんなことが言われているか、文献を参考にしました。『癒しモーション』

- ① 海の成分と人体、特に羊水の成分は似ていると言われている。また波の音は母親の胎内音に似ていると言われている。
- ② 海のもつ青い色には心を鎮め落ち着かせる効果や、血圧や脈拍・体温を下げ、呼吸もゆっくりにさせると言われている。
- ③ 海では波の動きで大量のマイナスイオンが放出されるが、それを取り込むことで脳内ホルモンが分泌されると言われている。
- ④ 波音の自然のリズムは「1/fのゆらぎ」と呼ばれる。その波の音を脳が感知する。

とでリラックスできると言われている。

⑤ 私達の呼吸や心拍のリズムにも「1/fのゆらぎ」があり、波音のリズムと調和し心地よさを引出していると言われている。

前浜は心のふるさと

その中でこの地域では浜おり・潮の華取りの風習があります。それは海辺に行き、海水に洗われたきれいな砂をかこに入れ持ち帰り、正月準備の終わった家の周囲にふりまいて清めることです。そして初日の出をみんなで拝み新年を迎えます。これは海辺に住む人たちの、海に対する愛情と畏敬の念のあらわれではないでしょうか。

付け加えて

私達はこんなに海に近い所に住んでいますが、もっともっと多くの人に前浜に出て、海に触れていただきたいものです。

しかし13m高の防潮堤があるので、それを超えなければ浜に出られません。しかも整備されていない階段、手すりが無い箇所もあります。改善してほしいです。

一方、海、浜は油断すると波にさらわれる等、取り返しがつかない危険性があることを心に留めておきたいものです。

(山下勝彦)

「舞阪駅」と「停車場」の町

「舞阪駅」は「馬郡駅」で開業

東海道鉄道（現在の東海道本線）は明治21年9月1日大府・浜松間が開通し「馬郡駅」が開業しました。開業当時は天竜川鉄橋が未完成だったため、名古屋・浜松間で一日に数本の運転でした。東海道全線は明治22年7月1日に開通しました。

3年後の明治24年11月1日に「舞坂駅」に改称されました。理由は舞坂町から駅名変更の猛烈な運動があったことや、「馬郡駅」周辺は民家が少なかったことなどから昭和15年6月1日に現在の「舞阪駅」となりました。

なぜ馬郡に駅が設置されたのか

線路の敷設は少しでも地形の高い所への



舞阪から弁天島への架橋
『静岡県鉄道写真集』

条件から天竜川によつてできた第三砂堤上のルートが適切と判断されました。舞坂の旧宿

場を通るルートは浜名湖に架橋する際、地形が低いことと軌道が直線上に敷設出来ないため、経費が大幅にかさむことから馬郡に駅が設置されたようです。

馬郡は隣接する舞坂宿に漁港があることや浜名湖周辺地域の、海運・産業・交通の要になる要素が理由となつたようです。

舞坂駅は弁天島海水浴場で発展

日本で最初の海水浴場は明治18年神奈川県の大磯海岸で開設されました。明治22年に弁天島でも開設され、舞坂駅は海水浴場の入口

駅となりました。明治25年5月19日の『静岡大務新聞』では、海水浴客の増加により人力車の利用客が増えていることを伝えています。『静岡県統計書』によれば舞坂駅の乗客数は、明治22年に1万2千人程度であったが、海水浴客の増加に伴い、明治30年には5万人を超すまでとなりました。人力車については明治26年2台、30年代10台、



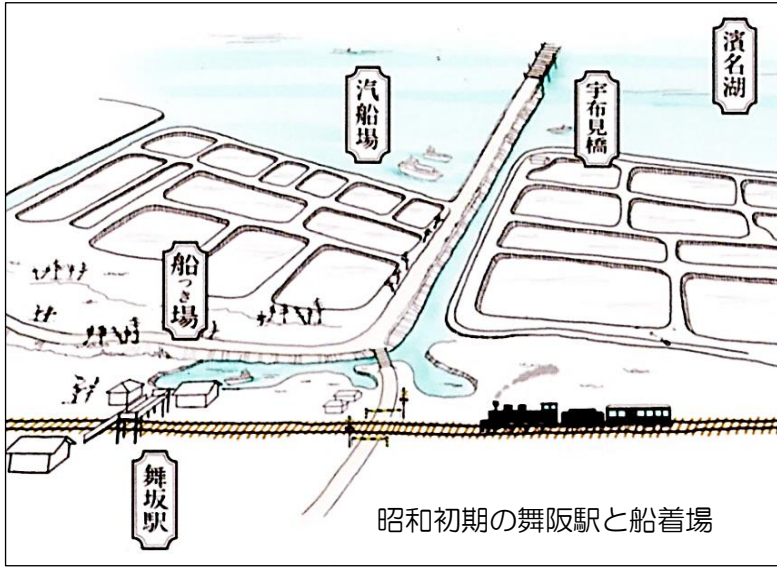
舞坂駅から弁天島へ向う客馬車『舞阪町史』

更に明治32年には客馬車も登場し、2台運ばれてきた記録が残っています。東海道の松並木を人力車が走って、弁天島に向かうしつと姿が目につかびます。そして明治39年7月には弁天島に夏季限定の臨時停車場が設置され、大正5年9月には常設の弁天島駅が開業となりました。

舞坂駅はウナギの輸送駅として発展

浜名湖岸でウナギの養殖が本格的に行われたのは、服部倉治郎が明治33年に吹上地区に8haの養魚池の創設が始まりとされています。浜名湖岸は温暖な気候、養殖に必要な水の豊富さ、種苗ウナギが浜名湖で確保できたこと（大正中頃から霞ヶ浦・利根川産も利

用）により、瞬く間に浜名湖岸20力町村で養鱈業が発展しました。舞阪町史によれば、生産量は大正7年9万貫が昭和2年には27万貫と約3倍に増大しました。出荷するウナギは浜名湖岸のほとんどの養鱈業者が浜名湖を船で搬送し、舞坂駅を経由して関西・東京方面に出荷しました。ウナギの飼料（当初は蚕のサナギ、大正



昭和初期の舞坂駅と船着場

末期は塩漬イワシ、ホッケ、サンマ等が東北・北海道から舞坂駅に到着し、浜名湖を渡り養鰻業者に届けられました。昭和16年頃から国家多事、飼料の入手困難、主食増産により、池はほとんどが水田となり、養鰻池はいったん姿を消しました。

戦後、養鰻業は急速に復活し、戦前を上回る貨物が舞坂駅で取り扱われ、貨物引込み線上では業者だけでなく駅員まで一緒に積み下ろしにあたりました。

昭和40年代半ばから、運送業は車が主体となり、昭和46年4月舞坂駅における貨物の取り扱い業務が廃止となりました。

浜名湖花博で駅舎改装

平成16年浜名湖花博関連事業の一環として舞坂駅の南北の地域で区画整理事業が実施され、平成15年11月15日に舞坂駅の橋上駅舎と南北自由通路が完成しました。

翌年開催された花博会場の受け入れ駅となり、シャトルバスが運行され大勢の観光客を受け入れました。南北自由通路ができたことにより、湖南高校の学生はじめ、多くの地元住民からも歓迎され現在に至っています。

「停車場」の町

明治30年駅東に遠洋銀行（昭和18年静岡銀行に合併）が創立され、浜名湖周辺の養鰻業者等に「信用貸付」による融資を行い養鰻業発展の礎を築き、大正10年に公有水面埋立法が公布され、湖面の活用が図られ養鰻業者が激増しました。町には銀行、郵便局、運送店、飼料店、製氷会社、缶詰工場などが創業しました。

養鰻業以外にも大正8年に西遠織布（株）が創業し、昭和4年には市内菅原町から「大和木工（株）」（後の日蓄木材、「JCOMピア音響



駅舎改装後20年、舞坂駅（北口）

（株）が移転してきました。後に（株）河合楽器製作所舞坂工場も創業し、町周辺は工業地帯となりました。

昭和5年駅南側地域で、住宅地確保のため耕地整理が行われ、町には商店街、

旅館、居酒屋、カフェ、ビリヤード、劇場もでき大正13年には私設消防組を組織、昭和8年氏神様の春日神社の本殿等を改築し、昭和12年には駅前区立若葉保育園（現在の春日こども園）が開設されました。

平成以降は養鰻業の撤退、工場の移転・閉鎖により、人口流出が続く勢いを失いつつありましたが、今年「浜名湖花博2024」が、ガーデンパーク、フラワーパークで開催され、窓口駅として久しぶりに賑わいを見せていました。

工場の移転・閉鎖の跡地は、新たに住宅街とスーパーができ、停車場の町は形を変え、発展しています。

（藤田博辞）

アリモドキゾウムシが

突然篠原農地を襲う

現在時点で篠原地区では、サツマイモの作付けが禁止されている。これは植物防疫法に基づき、令和5年2月17日付けで「緊急防除」が令和5年3月19日から令和6年3月末まで実施、更に延長されているためである。その経過をまとめてみる。

発生経過

令和4年10月下旬、浜松市の甘藷販売店から内部が黒変した被害イモと寄生していた害虫について問合せがあった。農林水産省名古屋植物防疫所清水支所で調査したところアリモドキゾウムシという害虫であると同定された。

何故本州で初めて発見されたこの害虫が、この浜松で発見されたかと疑問であったが、発生範囲を特定するため、本虫が確認された地点を中心に半径2km圏内を調査対象として、計403地点にフェロモントラップによる調査を実施した結果、12月8日までに23地点のトラップから計471頭の本虫の誘殺が確認された。それ以降も調査を続行しているがその後の調査では、本虫の誘殺は確認されなかった。これでこの地域に限られた範囲での



発生であることが判明した。

緊急防除の内容

初動対応の後、これ以上蔓延しないように、農林水産省より「緊急防除」が告示された。

- ・発生区域内のサツマイモの作付け禁止
- ・発生区域内からサツマイモの移動制限
- ・防除の区域：馬郡町、坪井町、篠原町の大部分（詳細は図で示された区域↓略）

・該当箇所への消毒、廃棄処置

海岸ハマヒルガオ一斉除去作業

その間、令和5年7月には一日でも早く「緊急防除」が解除されるよう生産者にも呼びかけ、発生区域内の寄生植物の除去で海岸のハマヒルガオの一斉除去作業を行った。参加者は5日間で延べ462人にも達した。

しかし10月と11月に新たにアリモドキゾウムシが発見されてしまった。国は11月29日に専門家を含むアリモドキゾウムシ対策検討会議を開き、「緊急防除」の期間を令和7年3月まで延長とした。これが現在の状況である。

緊急防除の解除は11月までの結果待ち

その後アリモドキゾウムシは発生してい

アリモドキゾウムシのデータ（国立環境研究所）

和名	アリモドキゾウムシ
分類群	コウチュウ目 ゾウムシ科ミツギリゾウムシ科
自然分布	インドまたはインドシナ半島
形態	体長6～7mmほどの甲虫、アリのような形態で、吻は長く、頭部は黒褐色、触覚は短い
生息環境	ヒルガオ科植物（サツマイモなど）の塊根（イモ）に寄生、農耕地の他、ハマヒルガオなど生息地にも分布
繁殖生態	ヒルガオ科植物の塊根に産卵し、卵は7～8日で孵化、幼虫は塊根を食べて14～21日で蛹化、羽化
生態的特性	食性：幼虫はヒルガオ科植物の塊根を食害
国内移入分布	小笠原諸島、大隅諸島、トカラ列島以南の琉球列島ほぼ全域、薩摩半島南部、高知県室戸市

ないが、昨年の例もあって、11月上旬までの発生状況を確認することにしている。終息したとの判断を待ちたい。

（山下勝彦）

浜風会会報第44号
篠原協働センター同好会浜風会
（篠原地区郷土の歴史を学ぶ会）
編集委員 委員長 山下勝彦
鈴木忠 鈴木理市
藤田博辞 山中道弘
発行責任者 山下勝彦
発行令和6年7月1日